

善隣

No.562 通卷829

2025年（令和7年）8月1日発行（毎月1日発行）

2025

8



一般社団法人 国際善隣協会

善 隣

目 次

2025年 8 月号

公開講演会記録

揺らぐ国際秩序と混迷する世界林 康夫 2

桜美林大学の創設者・清水安三と中国
——大正デモクラシー期の中国論の検証高井潔司 12

いわさきちひろと中国平山知子 21

中国ウォッチング編・訳 上松玲子 30

陶陶俳壇馬場由紀子 32

令和 7 (2025) 年度役員・顧問・諮問会委員名簿／常任委員会 委員長・
副委員長・委員名簿 33

協会通信 34

2025年 8 月の行事予定 35

みんなの写真館

シャーヒ・ズィンダ廟群（姜晋如）.....表紙／34

徐福殿（新宅久夫）.....表 4／34

—— 善 隣 第562号 通巻829号 ——

2025（令和 7）年 8 月 1 日発行

発行所 〒105-0004 東京都港区新橋 1-5-5

一般社団法人 国際善隣協会

TEL 03（3573）3051

FAX 03（3573）1783

発行人 井出亜夫

編集人 朝浩之

編集協力 山谷悦子、古田紀子

印刷所 (有)ゆにおんプレス

TEL 048-834-1201

定価 一部400円 年額4,800円

振替 00120-0-145956

国際標準逐次刊行物 ISSN 0386-0345

©禁無断転載

当協会は、中国ならびに近隣諸国
との相互理解を深め、友好親善・交
流を推進しています。

一般社団法人 国際善隣協会

揺らぐ国際秩序と混迷する世界

国際経済連携推進センター理事長 林 康夫



1. 歴史の終わり？

(1) 20世紀末、ソ連の崩壊を受けて
フランス・フクヤマが『歴史の終
わり』を発表

その要旨は「これからは世界全体で
自由経済と民主主義が拡大し世界の秩
序を支配することになる」との見解で、
自由経済、民主主義、法の支配に象徴
される資本主義社会の勝利を高らかに
うたったものだった。

ところがそれから四半世紀もたたな
い21世紀の幕開けから間もなく、世界

はフランス・フクヤマの予想とは全
く異なる「新しい歴史の始まり」を象
徴する様相を呈してきた。近年のG20
会合では共同のコミュニケーションさ
え出ず、国際社会は分断の様相を
呈してきたのである。

国際社会の構造を概観すると、①G
7やその他の欧州諸国＋オーストラリ
アなどのグループ、②ロシア、中国、
サウジアラビアなどのどちらかとい
うと権威主義的な国家グループ、③イン
ドはじめグローバルサウスといわれ
る国々で、①②いずれにも属さず、両グ
ループとの友好的な関係を維持し両グ

ループからのメリットを最大限に享受
しようとするグループに分かれ、これ
らグループ間の分断(Fragmentation)
が顕著にみられるようになった。

(2) 世界の大多数の国々が協力

自由貿易と世界経済の安定・拡大を
実現した自由貿易と民主主義の浸透は
残念ながら長続きしなかった。この背
景としては、自由経済をてこにした経
済運営が経済発展をもたらしたと同時
に看過できない格差や環境問題などを
生み出してしまったことにも原因があ
る。情報社会の発展により、これらの

事象が多くの人々に鮮明に感じることができるようになったことも影響しているだろう。

2. 世界情勢の変化の背景——

三大軍事大国の自己中心的な主張

(1) 米国の経済力の相対的低下

1971年のニクソンショックといわれる米国の政策変更によるブレトンウッズ体制の崩壊以降進行する米国の政治力、経済力の趨勢的低下と世界の安全保障を担う警察官の役割の放棄。

●トランプ氏の主張はMAGA (Make America Great Again)

(2) 中国の台頭 (図1参照)

先端技術分野での中国の急速な進歩と米国への追い上げとそれに伴う中国の膨大な対

米貿易黒字。

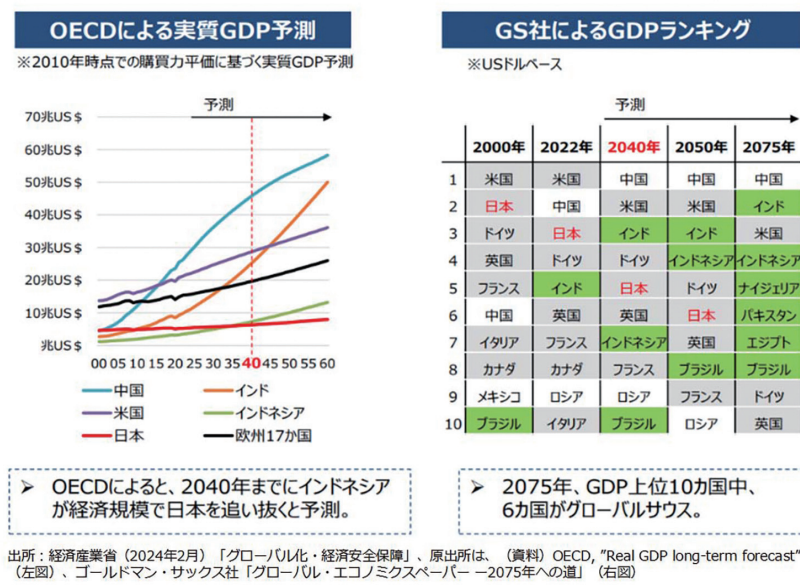
さらに中国の軍事力の増大と周辺諸国への軍事力による威嚇。

●習近平氏のスローガン「中国の夢」(中華民族の偉大な復興)

(3) ロシアの復活

ソ連邦崩壊時の混乱からエネルギー

図1 中長期的に高まるグローバルサウス諸国の経済力



価格の上昇による経済再建を実現。

経済力（ロシアのGDPは韓国並み）に比して強大な軍事力。

●プーチン氏の主張——「偉大なるロシアを復活させる」

三大軍事大国が、奇しくも同じタイミングで本来担うべき世界秩序を維持する役割を放棄し、自国中心の主張をしかも「同じような言葉であからさまに振りかざしている」のは興味深い。
↓国際協力体制の崩壊を象徴。

3. 世界の分断と国際経済秩序の混乱

実は私どもの財団から先般『揺らぐ国際秩序と混迷する世界——崩壊寸前の戦後国際規範』を出版させていただいた。現下の世界情勢の流動化、分断を踏まえて様々な視点から専門の先生方に安全保障、通商秩序に関する問題を論じていただいたものである。その中からとりわけ以下の問題に焦点を当てて、論文を執筆された先生方の考えを踏まえて議論を展開したい。

4. ウクライナおよび中東地域の混乱

(1) ロシアのウクライナ侵攻

●プーチン氏の主張——ロシアとウクライナの歴史的一体性

——「ロシアとウクライナは民族的にも、歴史的にも、宗教的にも、言語的にも一つのくくりに入る人々であってこれを裂こうとするのは米国とEUそしてそれに乗せられた間違ったウクライナの指導者である」と論じ、「ウクライナの主権はロシアのパートナーシップの範囲内のみに存続する」と主張。

——このプーチンの主張は元駐ウクライナ大使の角茂樹氏の論文で（全く根拠のないものとして）徹底的に論駁されており、ロシアのウクライナ侵攻は「蛮行」以外の何物でもないと言われている。

——おそらくロシアにとって、次第に東に迫ってくるNATOの拡大がロシアの安全保障に脅威との見解で、ウクライナ国土をNATO拡大への防壁

としたいとの意向なのであろう。

——双方に多大な犠牲を強いているこの戦争の結末は見通すことが難しい。トランプ大統領の仲介により一時的な停戦が実現しても（その可能性はほとんどなくなった）、ロシア・ウクライナ双方の主張が折り合うことは難しく、長く尾を引く問題となるであろう。

(2) 西側の経済制裁の影響（JOG MEC 原田大輔氏の論文から）

ロシアへの制裁は、ロシアの銀行を国際決済システム「SWIFT」から締め出した制裁のほか、①ロシア産金の禁輸、②石油価格上限設定措置およびロシア産石油輸送船舶を対象とする制裁、③将来的にロシア産ガスの制裁、④エンジニアリングサービスの禁輸、⑤非工業用ダイアモンドの禁輸の分野である。興味深いのはG7が禁輸をしている原油輸出量は禁輸以前に比べ増加している一方で、禁輸されていない天然ガスの輸出货量が大幅に落ち込んでいることである。これはロシアが2022年8月に自ら「ノルドストリー

ム」を完全停止し、欧州のロシアに対する信用が失墜したこと、そしてその1か月後には当該パイプラインが何者かによって破壊されたことにより、セキュリティ上問題のあるロシア産ガスに対して欧州で「脱ロシア」が決定的に加速したことが背景にある。

原油の輸出货量は増加しているものの、侵攻以前のヨーロッパ諸国に代わってインド、中国とトルコが大口輸入者として登場してきており、石油価格の上限制度の影響、中国、インドの買いたたきもあって価格が低下しており、ロシアの原油輸出収入は20%程度減少している。

天然ガスについては、供給余力がロシアにしかない現状でロシア産ガスの禁輸はガス価格の高騰をもたらし、需要国である西側諸国に跳ね返ってくるため禁輸はしていないが、その供給不安定性のため欧州諸国の脱ロシア化が加速している。ロシア産天然ガスについては、中国が圧倒的に有利な立場にある。トルクメニスタンからのパイプラインを持ち、中央アジア諸国やミャンマーからのパイプラインガス輸入も

7開始、ロシアの北極海の2プロジェクト（シベリアの力）ははじめ世界の主流プロジェクトにも積極的に参加し、国内生産も順調に拡大している。中国のロシア産ガス購入に関する交渉力は極めて強力で、インドがパイプラインガス市場に参加できない状況下、漁夫の利を得ている立場にある。

（3）中東（ガザ、レバノン、シリア）の混乱

イスラエルとアラブ諸国の対立は、有史以来の長い歴史を別にすれば、直接的には1948年のパレスチナの地におけるイスラエル国家の建設にその淵源がある。数百年もの間この地で生活してきた70万人ものパレスチナ人を追い出し、イスラエル国家を建設したことに對し、多くのアラブ人の国家にとって、この地からイスラエル（ユダヤ人）を追い出すことがアラブの大義とされてきたのである。その後のアラブとイスラエル両者の対立、紛争を経て1993年「オスロ合意」が結ばれ、いわゆる「2国家解決」の方向が示さ

れた。しかしながら、アラブ、イスラエル双方の強硬派、急進派がこの「2国家解決」には納得せず、合意は実現されないままになってしまった。強力な軍事力によってパレスチナの地におけるイスラエルによる厳しい統治が持続し、これに反発するアラブ強硬派はイスラエルをこの地から追い出すことに固執した。イスラエルにとってはパレスチナ国家が独立すれば、他のアラブ諸国と同様、経済力、軍事力を養って、再びイスラエルをこの地から追放する勢力になるに違いないとの認識の下、イスラエルの厳格な統治下でのパレスチナしか認める用意はないのである。パレスチナを訪れた人は、（入植地の拡大を含め）イスラエルのパレスチナに対する過酷な統治を見て驚くことだろう。イスラエル側がパレスチナ人に対する徹底的な弾圧を続けていた中で、2023年10月のハマスによるイスラエル人への攻撃は、イスラエルの危惧を裏付けるのに十分な事件であった。「イスラエルへのあらゆる脅威を取り除く」との意向の下に、ハマスの殲滅、

次いでイスラエルの脅威となっているヒズボラへの攻撃、アサド政権の崩壊後のシリア攻撃、いずれもイスラエルの安全保障のために徹底的に周辺の脅威を取り去りたいとのイスラエルの強い意志の表れなのである。

本件の解決は、多くの国が支持している「2国家解決」をイスラエル・パレスチナ双方が改めて合意し、これを国際社会がエンドースするとともに国連などを通じて政治的、軍事的に支えらるとともに、カギを握る米国がイスラエルの強硬派に左右されることなくこの方向を支持することしか解はないだろう（イスラエル寄りのトランプ政権の下では難しい解ではあるが）。

5. 米・中の大国間競争とグロバリズムの将来

（1）揺れる米国と不安定化する世界

世界の情勢に大きな影響を及ぼす米国だが、経済力の低下に伴って、かつてのように一国の努力と犠牲の下に世界の平和と秩序を維持しようとする力

も意欲もなくしている。いかなる大統領・政府が誕生しようと米国の自国中心の路線は大きく変化することはないことだけは確かなようだ。

特に新たに大統領に就任したトランプ氏は内向き体質が濃厚である。

とりわけ米国にその実力が肉薄しつつある中国をめぐる米中間の対立は一段と激しさを増す可能性もあり、世界の多くの国々に少なからぬ影響を及ぼすことは避けられない中で、各国は自らの立ち位置を改めて見直していく必要があるだろう。

第2期トランプ政権は、第1期の時と同様温室効果ガスの削減を合意した「パリ協定」からの再離脱を決定する。また、WHO（世界保健機関）からの撤退も決定している。

上院、下院の多数を共和党が握り、加えて最高裁判所の判事の多数を保守派が握っていることにより第1期の時に比して大統領の裁量の範囲が大きく広がったと考えられ、トランプ氏は1期目より徹底したトランプ主義を実行する可能性が大きい。

選挙期間中から標榜してきた対中関税も、就任後直ちに（2月4日）10%の追加関税を実施した。また、1か月先送りになったが、薬物対策を理由に対メキシコ、対カナダの関税も25%上乘せする旨を発表、実行した。また、すべての国からの輸入に対して25%の関税を課す旨の意向も表明している。トランプ氏の関税政策は目まぐるしく変転しており着地点を見通すことは難しいが世界貿易の現状と見通しを不安定化していることは間違いのない事実である。選挙中に表明した不法移民対策も就任後直ちに実行に移し、すでに、相当の混乱が起きつつある。

大統領選でのトランプ氏のハリス氏に対する勝利は、もともと労働者階級が支持基盤だった民主党が人種、ジェンダーなどに力を入れ文化的なリベラル化、インテリ化を深め労働者階級との亀裂を生んだことも遠因にあるとの見解もあるが、米国にはびこるインフレが労働者階級などの貧しい人々の生活を直撃し、民主党政権に対する不満が拡大したことが大きな要因であると

の見解も有力である。実際、米国では大学に行けない若者たちが増加しているとの統計もある。

しかしながら、現在トランプ氏が主張している政策、とりわけ外国産品への関税賦課や法人税などの減税政策を実行した場合、インフレを高進させることは避けられず、民主党政権時代を上回るインフレに見舞われることは必至であるといえよう。さらにトランプ大統領の「なんでも国内で生産させる」といった「毛沢東」を思い起こさせる政策は、現在の米国の巨大な経済を考えると、そのまま実行されたら米国のみならず、世界経済に大混乱をもたらすことになるため（またトランプ関税政策は米国自身に最も大きなダメージをもたらすとの学者の見解もある）、事態の推移によってかなりの軌道修正を行うことは不可欠であるが、トランプ氏の性格からすると果たして考えを変えるであろうか。

（2）中国の台頭と米・中大国間競争——
中国の軍民融合戦略（国家安全戦略

に走る中国)

中国は自由貿易体制を世界の公共財とは考えず、自らの国益追求の道具として考えていないのではないかとの疑念が生じ始めている。「軍民融合」と「製造強国」とのスローガンの下で国防に必要な技術には惜しみなく巨額の補助金がつぎ込まれる。このような中国政府の方針を背景に、中国経済の発展と技術進歩のために、留学生、お雇い外国人、諜報機関、サイバー技術を駆使した先進技術の模倣と窃取を繰り返し、これが西側諸国を驚かせ、世界市場は中国によって大きく歪曲されているとの認識が広がり始めた。

ただ、そのような中で中国が世界をさらに驚かせたのは、自国の巨大な市場と強力な工業生産能力を利用した貿易に基づく相互依存関係の武器化である。

加えて一帯一路戦略、アジアインフラ投資銀行、外国直接投資の積極的展開などにより新興国・発展途上国は中国経済に大きく依存するようになっており、国際場裏における中国の行動に

対して同調的な態度を示さざるを得なくなっている国々も増加している。

(3) 中国のエコノミック ステイトクラフト戦略

エコノミック ステイトクラフト (ES) とは政府が産業政策や貿易政策、通貨政策などの手段を使って

経済を誘導する政策を意味する。中国はESの手法を通じて、経済的手段を用いた国家の戦略的目標の達成を試みている。

中国経済の拡大と中国との貿易が拡大するにつれ、1対1で向き合っており中国に経済制裁の打ち合いで立ち向かえる国は米国以外にはない。こういった中で、これまで中国が貿易を武器化した事例は枚挙にいとまがない (図2参照)。

このような中国の姿勢は、貿易は朝貢国に対する中国皇帝の恩恵であり、皇帝を

怒らせれば貿易は差し止められるという清朝時代を想起させるものがある。このような中国の姿勢を背景に、産業の進歩に不可欠な半導体については各国とも自国内生産にかじを切るとともに、14ナノ以下の軍事用戦略物資たる最先端半導体およびその製造技術に

図2 中国による経済的威圧、貿易取引への影響も

- ミシンクタンク戦略国際問題研究所 (CSIS) によると、中国の経済的威圧は多岐にわたる。特に、貿易上の措置は幅広く、直接の輸出入に加えて、中国または第三国の企業活動に影響する場合も。

中国による経済的威圧の例

発動された措置	具体的な対象国 (措置) の例
輸入遅延・停止	オーストラリア (2020年: ワイン、牛肉等の輸入制限)
民間・国有企業の契約停止・拒否	リトアニア (2021年: リトアニア企業による中国国内における契約の更新および終了に支障が生じたとの報道)
検査および貿易障壁の強化	フィリピン (2012年: バナナを検疫上、通関拒否)
輸出制限	日本 (2010年: レアアースの輸出停止)
許可の取り消しまたは拒否	カナダ (2019年: カナダ企業による菜種油の中国向け輸出許可が取り消し)
対象国に協力する第三国企業への警告・制限措置	リトアニア (2021年: リトアニアから調達を行うドイツ企業の中国向け輸出が差し止められたとの報道)
関税または課徴金の引き上げ	オーストラリア (2020年: 同国産ワインにアンチダンピング関税を賦課)
中国内で操業する対象国企業への罰則	韓国 (2016年: 中国内の百貨店ロッテの店舗が強制閉鎖)
渡航許可 (ビザ) の発行停止・排除	オーストラリア、ノルウェー
開発計画や (無利子) 融資の協議中止	モンゴル
渡航勧告および警告	カナダ、フィリピン、韓国
国有メディアによるボイコット勧誘等	オーストラリア、フィリピン、韓国

(出所) 戦略国際問題研究所 (CSIS) を基に作成

ついて、米国はその対中輸出を厳しく管理し始めたのである。これに対して中国も自国法整備を進め対抗している。

(4) 中国指導部の国際情勢の変化に対する認識は一般的に三つの点に整理できる(慶應義塾大学の加茂具樹教授による)

- ① 国際社会の秩序はパワーの対比によって決まるもので、故に現状は覇権国である米国による秩序になっている
- ② 国際秩序は不完全で不合理な部分があり、改革する必要がある。
- ③ 中国の政治体制に対するイデオロギー的な攻勢とそれが内部の矛盾と結びつくことによって体制が転覆する可能性があり、それが中国の安全保障上の最大の脅威である。

中国政治は「不安全感」に紐づけられた国際情勢と国内情勢をめぐる情勢によって、「相対的国家安全観」が形作られ、その結果として政策選好が鄧小平以来の「発展」から「発展と安全の両立」へと転換し、一段と国家安全保障が強調されるようになっており、

おそらくその状況は長期的なものになる。

6. 経済安全保障議論台頭の背景と求められる多様な視点

(1) 米国における経済安全保障概念
米国には「国際緊急経済権限法」(IEEPA)と呼ばれる、安全保障

を目的とした経済的措置を大統領が実施できる、広範な権限を大統領に与える法律がある。

① これまでもこの法律の下で経済制裁や輸出管理などが実施されており、トランプ政権の対中国、対カナダ、対メキシコの関税賦課措置はIEEPAを根拠にしているという。

② ただ、最近になって新型コロナウイルス感染症のパンデミックの期間に半導体はじめ米国産業にとっての重要物資が入手困難になり、サプライチェーンが脆弱であると認識されるとその強化のための手段が模索された。

③ 政府主導の産業政策の展開―米国の産業政策は、これまでは自国産業を保

護するというよりも、どこの国の企業であっても、米国国内で生産することを優先するというもの。↓これは米国にとっての重要物資のサプライチェーンの安全保障であり、米国国内での製造業の復活により米国政治の不安定化を回避したい(雇用の安全保障)との思惑に基づくものと言える。

(注) 1990年代の日米自動車摩擦は、トヨタ自動車が米国に投資するとの決断で解決を見たことは記憶に新しい。

④ さらに中国に対する半導体の輸出規制、また、中国の半導体産業やAI、量子コンピュータなどを開発している企業に対する対外投資規制↓中国の技術開発が進むことで、米国の国家安全保障が脅かされることを懸念し、軍事転用可能な技術の開発につながるような投資や取引を制限し始めている。

(2) EUの経済安全保障概念

① EUは安全保障の問題については、基本的には加盟各国の権限であり、安全保障を目的として市場に介入するよ

3 いう措置を取ることが困難であり、国ごとに中国との安全保障リスクが異なるため足並みを揃えることも難しい。

②ただ、日本が経済安全保障政策を始めたこと、ロシアのウクライナ侵攻によってEUが対ロシア経済制裁を始めざるを得なくなり、EUが安全保障と経済を結びつけた政策を展開するようになってきた。

③中国がEU加盟国であるリトアニアに経済的な威圧措置を取ることにによって、EUも経済安全保障を真剣に考えなくてはならなくなった。2024年3月、EUは経済安全保障の五つのイニシアティブを発表し、サプライチェーンの強靱化や重要鉱物の安定供給といった分野に特化した安全保障戦略を打ち出している。

④EU産業界は、中国を有望な市場と考えており、中国に対する厳しい経済安全保障措置には反対の立場を取っており、そのため、EUの経済安全保障は中国からの報復を受けない範囲で政策を行うことが基本路線になっている。

（3）日本における安全保障概念の特徴

政治と経済の分離の時代は終わり、経済の「武器化」ないし経済的威圧の行為が増加、これを回避するための「戦略的自律性」の強化が重要視されるようになる。

①日本の経済安全保障上の措置は主として防御的なものであり、他国に対する「攻め」の手段を含む米国や中国の経済安全保障概念とは異なるものである。

②経済安全保障対策は、経済的なコストを伴うため、政策を実現する上で日本は政府とビジネスの戦略対話を実施し、ビジネスにとって合理的でない政策であっても円滑に実施することを配慮してきた。

③ただ、最近の米国の国家安全保障対策上の対中技術・戦略物資の貿易・投資管理政策に対応し、日本としても米国に追随せざるを得なくなり、経済安全保障政策の充実を図っている。

経済安全保障上の措置を取ること、しばしば自由貿易の原則と対立する。

WTO（協定29条）には安全保障例外はあるが、その解釈は限定的である。そのため、“Small Yard, High Fence”がスローガンとなり、管理される対象は限りなく小さくすることが規範とされている。

④日本としては、戦略的自律性を高めると同時にサプライチェーンにおける自国の不可欠性を高め、他国を依存させることで経済的威圧を実施せにくくする「戦略的不可欠性」を獲得することを目指す。

（注）中国も同様な「戦略的不可欠性」の充実を目標としているが、日本の「守り」に対し、中国は「守り」と「攻め」のための戦略になっている。

7. 国際経済の分断と実施される経済安全保障政策の評価

中国の台頭による経済安全保障面での不安などから、西側諸国も産業政策や通商政策（フレンドシップ・アライアンス・アライメントなど）で積極的に経済・貿易に介入するようになった。

（１）反グローバルの産業（フレンド シヨアリング）の評価

近年の貿易制限措置の実施によって米国の中国依存度の低下、中国の対米依存度の低下が顕著に見られる。代わって米国では中国への依存度の低下を埋め合わせるように、メキシコ、カナダ、EU、日本などへの依存度が上昇している。最近ではベトナムなどのASEAN（東南アジア諸国連合）、インドなどからの輸入も増加している。中国の輸出依存度は、米国のほかEUや日本への依存度が低下、ASEANやインドなどへの依存度が上昇している。産業政策の目的である分断（De-Coupling）は貿易統計を見る限りさほど進展していない（米中ともそれぞれからの輸入が他国に取って代わられ、見方によってはこれらの国を経由して輸入されているとも考えられる）。

ASEANなどグローバルサウスの国々は対立する米・中のいずれかを選ぶという選択は望んでいない。西側による対ロシア制裁は、（ロシアの石油

が西側諸国に代わってインドやトルコ、中国に輸入されているように）中立的な立場をとるグローバルサウスが「抜け穴」になって効果をそいでいると同様の事象が安全保障政策に基づく貿易制限措置についても生じているのだ。

（２）国際経済の対立構造

現下の国際情勢はかつての東西冷戦を彷彿とさせる対立構造が再び浮かび上がっている。ただ当時の東西冷戦期と決定的に違う点がある。それは中・ロとも世界市場にしっかりと組み込まれ、とりわけ中国が経済規模で巨大な経済力を誇る強力なプレーヤーになっていることである。しかも日本が身を置いている西側陣営は過去の冷戦期のように経済的に圧倒的に優勢というわけではなく、経済的手段による威嚇や強圧からの防戦を真剣に考えなければならぬ立場にある。巨大な経済力を持ち、世界貿易のサプライチェーンの重要な一翼を担っている中国による経済的攻撃は、エネルギー資源と武器以外にめばしい輸出産業のないロシアと

は比べものにならないほど甚大な影響を世界経済に及ぼすだろう。グローバルサウスの国々にとっては、環境、人権、ジェンダーなど注目の多い西側諸国だけでなく、中国が提供する経済的利益や開発モデルも魅力的な代替案になっている。

8. 我が国の対応（日本の選択）

（以下の論点は国際大学の田所昌幸特任教授および上智大学の川瀬剛志教授の論文による。）

（１）自由貿易が支えるサプライチェーンの強靱性

伝統的な通商協定によって実現される自由貿易はグローバルサプライチェーンに外生的なショックから回復する強靱性をもたらし、それが近年の経済的威圧の事例の調査によって実証されている。

①2020年に当時のオーストラリアのモリソン首相が新型コロナウイルスの発生源について独立調査を中国に要求したところ、中国は小麦、ワインへのダ

ンピング防止税、相殺関税を課し、牛肉や木材への衛生検疫理由の輸入制限などの通商措置を実施した。しかしオーストラリアはWTOやCPTPP（環太平洋パートナーシップに関する包括的および先進的な協定）が実現する開放的な自由貿易体制の下で代替的輸出市場を見つけ、他方でWTO紛争解決手段を利用することで効果的にこの威圧措置を無力化し、結局一昨年初以降の中・豪関係の改善とともに措置は順次撤廃されている。

②WTOの“World Trade Report 2023”も経済的威圧、さらにはパンデミックなど近年の外生的なショックによるサプライチェーン危機からの回復に自由貿易体制が貢献していることを、実証研究を援用して論じている。

（2）我が国の政策オプション

船橋洋一氏によると安全保障には黒字国と赤字国が存在する。米国は、資源、食糧、先端技術まで自給できる黒字国だが、資源や食糧の多くを輸入に頼る日本は貿易依存度の高い典型的な

赤字国である。周囲を安全保障上の脅威となる中、ロ、北朝鮮に囲まれ、現に最大の貿易相手国である中国の経済的威圧にも直面している。こうした中で、市場アクセスを確保する伝統的な通商協定は強靱なサプライチェーンの構築の基礎として欠かせないものであり、我が国の経済安全保障のための政策オプションの基本は自由貿易体制の強化・拡大であろう。特にインド太平洋のフレンドシップアリングを推進せんとすれば、今後ともCPTPPの拡大、（市場アクセスのコミットがないとはいえ）IPEF（インド太平洋経済枠組み）の相互補完的な活用、さらにはインド太平洋を越えた他のメガFTA（巨大自由貿易協定）、例えばEUAや中南米のメルコスールとの連結を模索するの我が国の経済安全保障体制の一層の強化に資することになるだろう。（2025年3月7日・公開講演会）

筆者略歴（はやし・やすお）

1966年3月東京大学法学部卒業。
同年4月通商産業省入省、1969

年7月オックスフォード大学留学。
1998年7月海外経済協力基金理事、1999年10月国際協力銀行理事、埼玉大学大学院客員教授などを歴任。2000年6月三井物産（株）代表取締役常務取締役、2004年4月同社副社長執行役員、欧州三井物産（株）社長、2006年4月同社顧問。2007年4月日本貿易振興機構（ジェトロ）理事長。2011年10月同機構顧問。2023年6月国際経済連携推進センター理事長。

「花岡事件」から80年

戦前、日本国内に強制連行された中国人労働者が過酷な環境に耐えかね一斉蜂起した。7月1日、今年も秋田県大館市の信正寺で慰霊祭が開催された。参列した当会の井出亜夫会長と会員の石飛仁氏の報告を本誌次号に掲載予定。

公開講演会記録

桜美林大学の創設者・清水安三と中国

——大正デモクラシー期の中国論の検証

北海道大学名誉教授 高井潔司



清水安三との出会い

2024年11月、『民族自決と非戦——大正デモクラシー中国論の命運』という本を出版したところ、矢吹晋先生から国際善隣協会で講演してはという提案があり、十数年ぶりに来ました。

この間、桜美林大学でジャーナリズム担当の教員を務め、中国論からも離れていました。本の帯には「侮蔑的対中姿勢」を捨て、真の相互理解・協調へ」と書いてありますが、これは編集者が作ったもので、私の執筆動機は、桜美林大学に着任し、本の表紙になっている桜

美林大学の創設者、清水安三が大正期から敗戦までに書いた数多くの中国に関する評論に接し、そのユニークで優れた中国論がどのようにして生まれたのか、という驚きから出発しました。

私は新学期直前にドタキャンした人の後任となったため、桜美林大学がどういう経緯で誕生したのか、創立者の清水安三がどういう人物なのか、ほとんど知らなかった。

着任1日目に開かれた新規採用者の研修会で創設者の清水安三の自伝的評論集『石ころの生涯』を渡された。目次をパラパラとめくって驚いた。第一部

わが生い立ち、第二部 崇貞学園物語に続き、第三部は中国論とあった。そこには25本の評論が掲載されていて、その論調は、当時日本では排日運動と非難されていた五四運動を高く評価し、日本の軍国主義を批判するなどの確に中国の当時の状況を照らし出す内容だった。

私が読売新聞の元北京特派員であることを知ってか、翌日から同僚の先生たちが、こんな資料がある、清水安三に関してこんな本を書いたと、研究室に持ってきてくれた。そのうちの一冊が『清水安三先生遺文集(二) 日本のが中国政策を激烈批判——ジャーナリス

ト活動（1919（27））である。この時期の150本近い中国に関する清水の評論が掲載されていた。この本では2度目の衝撃を受けた。読売新聞に、1921（大正10）年の12月から23（大正12）年5月の1年半のうちに37本の清水の記事が掲載されていた。北京から投稿したものだ。しかも1923年5月以降、それがぶつ切り切れている。私はこの事実を全く知らなかった。そこから私の研究が始まった。

大正デモクラシー中国論とは？

清水の記事の背景や同時代の中国論との比較を検討する中で、吉野作造や石橋湛山、また大阪朝日新聞の社説などが一つのグループ、潮流として浮かび上がってきた。私はそれを「大正デモクラシー中国論」と命名した。彼らの中国論は、中国の立場にも立って日中関係を見ろという特徴があり、そして中国の民族自決の運動を支持し、日本の軍国主義を戒める、つまり非戦を訴える。この本のタイトルである「民族自決と非戦」につながっている。

この本では明治期の大隈重信、福沢諭吉、内村鑑三に始まって大正期・昭和期の吉野作造、石橋湛山、橋樸、尾崎秀実など様々な人物の中国論とその足跡を描いた。戦後、1960年代から70年代、アジア・アフリカ諸国との連帯が強く叫ばれる中、戦前の中国論、アジア論に対する研究がかなり進んだ。だがマルクス主義歴史家の間では、大正デモクラシーに批判的で、とくに対外論は「内にあつてはデモクラシー、外にあつては帝国主義」と否定されてきた。その結果、これらの人々の中国論は低く評価され、一部の研究者を除いて、忘れ去られることになった。

だが、大正期の政治、外交は必ずしも大正デモクラシーが主流であったわけではない。むしろ藩閥政治、軍閥政治が主流であり、とくに外交は軍閥による帝国主義の志向が強く、大衆世論もそれを支持していた。大正デモクラシーを提唱した人々は決して帝国主義を主張していない。むしろ戒める立場に立っていた。私の本では、今一度こうした人々の中国論を読み直し、評価

の見直しを行った。

本日は清水安三を中心に話します。

清水の生涯を決定付けた来日宣教師

まず彼の生い立ちや中国派遣の経緯から。彼は1891年滋賀県高島郡の豪農の三男として生まれた。長兄の放蕩によって家は没落し、旧制膳所中学校時代は、兄の妾が経営する旅館兼料理屋から通学し、勉学に身が入る環境ではなかったと述懐している。救いは英語教師として赴任してきた宣教師でもあるウィリアム・メレル・ヴォーリズだった。ヴォーリズは、メンソレータムの近江兄弟社の設立者でもあり、お茶の水の山の上ホテルなどの設計者としても知られる。彼の影響から洗礼を受け、大学も同志社大学の神学部に進学した。

当時、日清戦争の勝利などもあって、様々な日本人が中国に渡った。大陸雄飛、一旗組、公安警察に追われての逃亡、中国の革命支援……など多様な思惑があった。

清水は大学時代、徳富蘇峰の「我国

の宗教家に、支那伝道に一生捧げる者ありや」という文章に、それなら自分がと決意を固め、義和団事件の犠牲者ペトキン牧師の「自分が亡くなっても、息子を育て、また中国に派遣してほしい」との母校エール大学にあてた遺言に感動し、組合教会の中国派遣募集に手を挙げた。やはりヴォーリスの影響が一番大きいと言えるだろう。

中国で宣教師のかたわら評論活動を開始

清水は1917年に奉天（現在の瀋陽）に赴任、1年半滞在するが、1919年に北京に移った。この頃、彼は『我等』という日本の雑誌に評論を投稿し始める。第一作は1919年5月号に掲載された「支那生活の批判」である。この評論はこう始まる。

「支那は傲慢なヨーロッパ人のように、未開の野蛮人ではない。……支那人は気早な日本人の批判するやうに、過去の文明人ではない。或は過去の国民であるかも知れぬが、決して過去の人間ではない。彼等には現代文明

よりか先を越した思い切った若々しさがある」

だが、中国の現状は厳しい混乱の状況にあることは清水も否めない。しかし、この点を清水は「支那は土の海原である」「支那は一夜造りではない。五千年の歴史が纏い付てゐる」とし、「この『広さ』の為に支那は、大男知恵が総身に廻り兼ねている所があり、『長さ』の為に伝統因習の悩みがある」と中国が直面する悩みを中国社会の基本的な構造から描き出している。

日本では中国人の民族性について、天下、国家を考えず、利己主義で、砂粒のように団結心もないと見る声が圧倒的だった。この点について、清水は「支那は少数の『馬鹿な論客』と『伶俐な民衆』の多数から成立っている」と、異なった見方をしている。

「馬鹿な論客」は泥棒を前にして親子が口論しているという。「馬鹿な論客」は「政治家」、「泥棒」は「侵略者」、「親子が口論」は「内部抗争」と置き換えるとよくわかる。清水は、日本の中国通の「支那人は利己一天張り」との

指摘を批判し、「支那人は日本人などよりか、幾層か親切で正直で利他である。彼等は只国家と統一者とに対して利己であるのだ」と分析する。なかなか面白い人間観察であり、中国の将来性を高く評価することとつながる。

五四運動の波を体験

北京に移住した清水は、その年に中国の革新運動である五四運動を目撃する。日本国内では「反日運動」「排日運動」と見られていた。だが清水はリーダーたちとの交流を通し民衆運動の実態を肯定的に理解した。

「支那において群衆運動が、ああまで成功しようとは、誰しも思っていたらなかった」「日本の軍閥の連中は、猶も支那官憲の威嚇に信頼して排日運動を制止しようと考えへてゐる」「しかし番頭や巡査兵士連中に、排日感情が胸いっぱいである限り、どうすることもできない」「排日者をすべて収容するには、四億の国民を幽閉するだけの留置場または牢獄が必要になるかもしれぬ」「デモンストレーションを一度でも見たものは、民

衆の力を今さらのように感じるであろう」
「今にして日本人が考え直さねば、日本人は世界の人間から仲間はずれになるに相違ない。孤立の国家が亡ぶか亡びぬかは、具眼者が一寸考えれば解ることである」（『基督教世界』）。

清水の中国論を支えた大阪朝日新聞人脈

この『我等』という雑誌は、「白虹事件」で大阪朝日新聞から退社に追い込まれた長谷川如是閑らによって創刊された。「白虹事件」は富山の米騒動に端を発した反軍閥政治運動の中で、「白虹日」を貫けり」という内乱を予知する故事成語を使って報じた大阪朝日新聞を、政府が弾圧した事件。執筆者、編集人が処罰を受けただけでなく、社長は右翼のテロに遭い、編集幹部は一斉に退社に追い込まれた。日本の新聞紙上で最も激しい弾圧事件の一つと言われる。長谷川は後述する吉野作造と並んで大正デモクラシーの旗手として知られる人物だ。清水安三が中国赴任にあたり組合教会の幹部と大阪朝日新

聞にあいさつに行く。そのとき対応したのが社会部に所属していた長谷川如是閑で、中国赴任の抱負を簡単に紙面で紹介してくれた。そんな縁から『我等』に投稿したのである。

第一作の投稿が採用され、原稿料も届き、気をよくした清水は毎月のように投稿した。翌1920年には4本の評論が掲載されている。こうした評論が注目され、「今度は読売新聞の編集長の丸山侃堂氏かんどうから、『支那当代新人物』と題して、二三十回に亘って連載の文章を書けという注文が来た。そこで私は陳独秀、胡適、魯迅、周作人等を紹介することにした」と回想する。

短期で終わった読売新聞での活躍

丸山は長谷川同様、白虹事件で大阪朝日を追われ、読売新聞の政経部長となっていた。執筆の舞台は読売だが、こでも大阪朝日新聞人脈が生きていた。読売新聞はこの時期、発行部数が数万部に落ち込んでいた。同じく白虹事件で東京朝日新聞の編集局長を辞した松山忠二郎を社長に迎え、再建に乗り

出していた。松山は再建に当たって国際報道を重視した。『讀賣新聞八十年史』によると、「松山が讀賣の経営に乗出すや非常な意気込みで他の一流紙——朝日新聞を仮想敵とみなし、特に政治、経済、外交記事に主力を注いだ。その頃は対独講和条約が調印されて間もなく、わが国内の経済産業などはこの平和条約による世界改造の転機に立つ重大時期で、新聞も国際問題が重要な地位を占めていた」と当時の読売の状況を伝えている。

清水の原稿が大量に掲載されたのもうなずける。その活躍も一年半で終わった。読売は再建策が功を奏し、発行部数が10万部を超え、新社屋の建設を進めていた。その落成式の当日、関東大地震が発生した。新社屋は焼失し、再建不能に陥った。その読売を買収したのが、元警察官僚の正力松太郎だった。丸山侃堂ら改革派の幹部は反発し、一斉に退社した。当然清水は読売新聞での執筆の機会を失う。ちなみに侃堂は、戦後民主主義を牽引した丸山眞男東京大学教授の父親だ。

活動の場を『北京週報』に移す

『北京週報』は北京在住の日本人が主宰し、日本語で書かれた中国問題専門雑誌。戦後の中国政府宣伝誌とは全く別物だ。発行地北京を中心に部数は数千部。魯迅や李大釗（中国共産党の創設メンバー）、胡適、周作人ら当時の中国の新たな思想、文化を推進した気鋭の知識人たちも寄稿。一時期は日本国内にも郵送され発行部数は1万を超えたという。

清水は1924年から毎週のように、「女性解放運動」や「孫文の思想と人物」など中国の新しい動きを紹介し、「治外法権・租界を放棄せよ」「中国は赤化するか」といった過激な評論を書いている。それらの評論、研究をまとめて2冊の本を日本で刊行した。

吉野作造も激賞した清水の中国論

『支那当代新人物』と『支那新人と黎明運動』の2冊の中国研究書で、2冊の本の序文を書いたのが、大正デモクラシーのもう一人の旗手、吉野作造

だ。他人の書いたものに序文など書かないという吉野だが、安三の著作だけに書いた理由をこう記す。

「第一に清水君の本は非常にいい本だ。清水君は支那の事物に対して極めて公平な見識をもっている。今日は親友の交わりを為しているが、予が氏を識るに至ったのは、実は大正九年の春同氏が某新聞に寄せた論文に感激してわれから教を乞ふたのに始る。爾来同氏はいろいろの雑誌新聞に意見を公にされて居るが、一として吾人を啓蒙せぬものはない」

「第二に清水君の論説する所は悉く種を第一の源泉から汲んでいる。書いたものによって其人の思想を説くのではない。直接に氏の書中に描かれた人々と長年親しく付き合っているのである」

「第三に同君の本書に論じている題目は同君にとって他人の仕事ではない。我が仕事同様の同情と興味を以て取扱っている」

「第四に清水君はまたその好む所に偏していい加減な事をいう人ではない。悪いことは悪いと憚りなくいう丈の勇

気と聡明とをもっている。この点において同君の書いたものはあてになる」

吉野が序文でいう「第一級の源泉」とは、すでに紹介した魯迅や李大釗らを指す。清水はしばしばこうした人物を自宅に訪ね歓談し、それをもとに記事を書いた。

吉野作造が北京大学教授の李大釗と連絡し、日中の学生交流を進めようとしたとき、清水がその仲介役を務めた。ここでも大正デモクラシー人脈が機能している。

共に戦う丸山昏迷

吉野から絶賛された清水の取材のスタイルだが、清水の独創というより、同僚の丸山昏迷から学ぶところが大きかった。二人は協力しながら、競うように中国の革新リーダーに食い込んでいった。清水が戦後書いた「回憶魯迅」という文章の中で「北京の思想家や文士達に最初に近付いた者は実に丸山昏迷君であって、多くの日本からの来遊の思想家や文士達を、或は周作人さん、或は李大釗先生の家々に案内した者は

丸山昏迷君であった」と記している。

丸山昏迷という記者も非常に興味深い謎多き人物だ。清水より3歳年下。1895年長野県の旧北安曇郡八坂村（現大町市）の農家に生まれ、本名は幸一郎。彼も読売新聞に投稿したり、北京の風土、名所、慣習などを紹介する本を出版した。30歳という若さで早逝したこともあり、その経歴はほとんど不明だった。しかし、戦後、1980年代、数人の研究者によって彼が地元の本屋の店員をし苦学の末、上京し、中央大学夜間部に入學したが、大杉栄などと関係を持ったことで、日本を追われ、大陸に逃れたことが明らかにされた。同じ村の出身で『北京週報』を創刊した藤原鎌兄を頼り、同誌の記者となった。中国の左翼運動の活動家とも接触し、李大釗と一緒に1920年、北京から日本社会主義同盟に加入している。中国共産党の創設前のことだ。

大正デモクラシーを反映した

『北京週報』

1970年代のアジア経済研究所の

研究プロジェクトの一環で『北京週報』を分析した小島麗逸は「経営的に日本権力、中国政府から自立していた『北京週報』は二つの面をもっていた。藤原に代表される顔と清水、丸山に代表される顔である。後者は、文学・思想面に限られたが、伊藤氏と通ずるものがあつた」と述べている。伊藤氏とは中国研究で当時トップレベルにあつた満鉄の調査部の責任者、伊藤武雄のこと。社会科学の基礎を学び、満鉄の下、調査研究にあつた伊藤らと比べれば、清水たちは研究というより評論にすぎない。だが、改革のリーダーたちと直交交流し、中国の新たな胎動を実感し、評論を書いた。

一方、藤原は中国革命の胎動を全く評価していない。アジアの盟主たる日本の指導によって中国を救済し、欧米の支配からの脱却を図ろうというアジア主義者だった。五四運動の翌年に書いた文章では、「昨日支那側の有力者と会せるに今日は所謂国恥記念日である」と云う。余の曰く彼の如きあんな日支協約（対華21か条要求）にして国恥と云

うならば、支那の国恥記念日は更に山の如く設けなければならぬ。（中略）余輩をして忌憚なく謂わしむれば支那の国恥は、（中略）支那の現状其ものが世界に於る大国恥ではないか。全世界が新しき時代に入るべく改造の努力を尽しつつある時、（中略）南北の内輪喧嘩から始まって今では南々北々支離滅裂となつて私利と私欲とを是れ競つて居る」と述べ、清水らとは全く異なつた評価をしている。

しかし、藤原は一方では大正デモクラシーの申し子でもある。『北京週報』は日本政府や中国の各方面から支援も干渉も受けない「公平、自由、正確」をモットーに刊行された。政治的な立場や主張の異なる清水や丸山も採用して、多様な言論を保障した」と小島はいう。

『北京週報』の停刊

リベラルな二人の記者を抱え、とりわけ共産主義者の疑いのある丸山には常に北京駐在の憲兵隊が眼を光らせ、1930年に停刊に追い込まれた。戦後、藤原と妻のつたが出した2冊の回

想録によると、「陸軍中佐、佐々木到一氏の『南方革命勢力の実相と其の批判』の書を我が社にて発行し、その新刊書は日本警察署を経て納本すべき規則を私は（経営の担当）知らず、納本せぬまま、一般に売り出してしまった。又其前に社の清水安三氏が南方へ革命視察して記事を『北京週報』へ連載したりで、我社は日本軍部の反感を買っていた」とその経緯を明かしている。

清水は停刊になる『北京週報』に最後の原稿として「国際精神と社会精神」というエッセーを書いている。

「私は過去十年の間、北京においていつも、身を左端に置き、常に叫び続けて来たのである。ある時は国賊視され、ある時は過激派と罵られ^{ののし}、馬鹿といわれ狂人と扱われた」

「私が国賊視されたる理由はどこにあるか。非国民として罵られたる理由はどこにあるか。それはいうまでもない。私に一つの国際精神があるからである。私は日本民族を愛する心は十分にある。けれども同時に、隣国支那の憂いを、わが憂いと為すだけの心持ち

を持っている」

「時折り凄まじい議論をなし、出兵に反対し、祖国を攻撃しても、それはいささか支那人の排日感情を緩和するとも、けっして悪い結果をもたらすものではあるまい」

軍部の圧力が高まる中、清水は『北京週報』という言論の場も失った。

宣教師としての仕事

この間、本業の宣教師の仕事はどうなっていたのか。北京に移った1919年は、華北地域は未曾有の飢饉に襲われ、清水は日本国内に救援募金を呼びかけ、児童を救出するための収容所を設置した。翌年まで約800人の児童を救援した。その延長上に1921年北京周辺の若い女性たちを支援するための崇貞工読女学校（のちの崇貞学園）を設立した。貧困から売春婦に身を落としかねない女子が仕事と読み書きを学ぶ場として設置された。それが現在の桜美林大学を中心とする桜美林学園の前身となる。日本の組合教会からの送金はこの学校経営につき込み、評論活

動は自身の生活費を稼ぐためだった。

ただ清水自身は派遣地の事情を調査し、報告することも宣教師の仕事であると考えていた。19世紀以降、欧米の宣教師は布教だけでなく、欧米の科学技術や文化を翻訳して中国に紹介し、また中国事情を調査し出版して広く世界に知らせるという活動を行っている。清水はこうした事情をよく自覚していた。

大正デモクラシーと軍部

清水らの中国論の背景となる大正デモクラシーは、普通選挙の実施と政党政治の展開、ワシントン会議などを通じた軍縮の実施、そして社会的には大正モダンと呼ばれる自由で頹廃的なムードに包まれた。この風潮は直接的にも間接的にも軍部や右翼を刺激した。軍縮は軍の権益を侵し、政党政治は軍と密接な関係にある藩閥政治の否定である。大正モダンは都市部に限られ、兵士の出身母体である農村部は困窮の最中にあった。

軍や右翼の対抗策は、政府要人、財界人へのテロや反乱だったが、最も組

組織的な行動は満州事変の断行だった。それは総動員体制の確立、日中戦争、太平洋戦争への流れとなる。軍国主義の、清水をはじめ、私が「大正デモクラシー中国論」者と名付けた人々および新聞は、それぞれに様々な運命をたどることになる。吉野は満州事変を侵略だと断じたが、間もなく不遇のうちに亡くなる。大阪朝日新聞は軍国主義を煽る新聞へと変節した。石橋湛山は表現を工夫しながら、抵抗を続けた。

中国に身を捧げた妻の死と才女との再婚

評論執筆の場を失った清水は、崇貞学園の経営を妻や在留邦人にゆだね、日本に出稼ぎに出る。キリスト系の雑誌の編集者や同志社大学の講師などを務め、数年間、学園維持のため送金を続けた。この窮状を救ったのは、恩師ヴォーリズの設立した近江兄弟社で、清水は同社のメンソレータムを販売する北京駐在員の職を得て、再び大陸を舞台に仕事することになる。しかし、もう一つのより大きな不幸に見舞われ

る。それは妻の美穂を38歳の若さで喪ったことだ。美穂とは大陸に渡った直後の1918年に結婚、二人で児童收容所や崇貞学園を運営してきた。安三には、12歳の長男、10歳の長女、8歳の二男が残された。

読売新聞が正力時代に入って、紙上からすっかり名前の消えた清水安三だが、データベースで検索してみると、1935年6月5日の紙面にひょっこりその名前が登場する。

「四十三の花嫁 小泉女史が『青春よサラバ』という見出しの記事だ。「人はやっぱし一生に一度結婚という花をかざさねばいけないものか。独身で有名な青山学院専門部教授「女子教育運動」のマスターオヴアーツ小泉郁子女史の四十三年の独身生活がポロリ砕けて支那は北平にいる清水安三（43）」という人と結婚するのである」と書き出し、写真入りで小泉女史の結婚を祝う才女たちの祝賀パーティを報じている。清水の再婚相手はそれほどの著名人だった。

この結婚、清水が北京から書いた求婚の手紙によって実現した。実は、小

泉郁子とはアメリカのオーバーリン大学のクラスメートだった。清水は1924年、北京からアメリカに3年間、留学していた。留学の前年、倉敷紡績の大原孫三郎社長が北京を訪問した際、清水がガイド役を務め、観光名所ではなく、庶民生活の実情視察や五四運動のリーダーたちとの面会、自身の設立した学校訪問などを設定して、大原社長が感動し2年間の留学の費用を提供した。

なぜ新聞記事になるほどの才女が、3人の子持ちの北京在住の貧乏宣教師と結婚に踏み切ったのか。小泉郁子はミシガン大学で教育学の修士号を取り、帰国後青山学院女子専門部の教授に就いた教育学の専門家であり女性運動家でもあった。自身で学校経営を実践したいという思いが強かった。

北京の聖者に祭り上げられる

この間、満州事変から日中戦争へと戦火は拡大。日本が国際社会から孤立する中、日本外務省は清水夫妻の学校運営に目を付け、中国人、朝鮮人を救済する安三の活動を紹介する英語版の

『愛の建設者』を出版し、対外宣伝に利用した。総動員体制の下で、大陸文化工作者に仕立てられ、日本の新聞、雑誌上では「北京の聖者」と祭り上げられた。北京在住の中国通として、日中戦争勃発の1937年には中央公論に4回にわたって投稿している。

厳しい言論統制の中、かつてのような激しい軍国主義批判はないが、それでも慎重な言い回しで日本の対中国姿勢を戒める発言が随所に見られる。例えば「その後の蒋介石」（『中央公論』1937年4月号）という論考では、西安事件の意義について、「どんな意味において、画期的事変であったかというに、それはいうまでもなく民国支那が、内争時代を完了して、実に統一時代に入ったという意味においてである……そのことが直ちに『容共』とまで進展するかどうかは今後の問題であるが、もうお互いに内争は止そうということになった」と述べ、とかく分裂状態といわれる中国が統一戦線で日本に向かってくることを予測している。

ハワイでしかした舌禍事件

学校の経営のため、安三は寄付金集めに奔走した。安三は1939年末から約半年、ハワイ、アメリカ、カナダを回って各地で講演会などを開き、寄付金を募った。とくにハワイでは、その席上、南京虐殺事件が本当にあったのか、どうかとの質問を受け、安三は事件の存在を否定しなかったことで、物議をかもした。日本総領事館から即帰国を命じられたが、その後もアメリカ、カナダ行脚を強行した。その結果、北京に戻ると1か月にわたり憲兵隊の取り調べを受けた。最終的に集めた寄付金17万円のうち10万円を軍に収め、事件はうやむやになった。

憲兵隊は日頃から安三の言動を監視していたし、北京の教育局の日本人顧問はクリスチャンの経営する学校を閉鎖させようと画策していた。しかし、「北京の聖者」と祭り上げられ、天皇から下賜金を受けた安三をそうやすやすと罰するわけにもいかなかった。

こうした経緯もあって、研究者の中

には、安三を日和見主義者と批判する人もいる。学校の存続のために妥協したところもある安三だが、最後まで国際人として軍部の暴走に抵抗した。

戦後は桜美林学園の創設に専心

敗戦後、安三は北京の学園の全てを中国当局に接収され、着の身着のまま帰国、一から現在の桜美林学園を築いた。北京時代同様、寄付金を募るため、国内外を歩いた。ジャーナリストとしての活動は行わず、北京時代の業績は一部の関係者、研究者を除き、忘れ去られることとなった。

(2025年3月21日・公開講演会)

筆者略歴(たかい・きよし)

神戸市生。1972年東京外国語大学卒業。読売新聞社入社、上海および北京特派員、論説委員を歴任。1999年北海道大学教授、2000年同大学院教授。2012年桜美林大学教授、2019年退職。主な著書に『甦る自由都市上海』『中国報道の読み方』『民族自決と非戦』。

公開講演会記録

いわさきちひろと中国

いわさきちひろ記念事業団評議員・弁護士 平山知子



童画家・いわさきちひろの絵は、ちひろカレンダーや子どもの絵本で見ることがあるという方がいらっしゃるかと思います。

黒柳徹子さんが、1981年に『窓ぎわのトットちゃん』を出版しましたが、この挿絵がちひろの絵です。2023年12月には、単一著者による自叙伝としては世界最高の発行部数として、ギネスに登録されました。さらに、今その続編も出版されていますが、その挿絵もちひろの絵です。ギネスに登録されるほどというのは、外国での翻訳出版も多いからです。とくに、中国では大変な人気のベストセラー本で、

『毛沢東語録』に次ぐ発行部数とか……。

なお、黒柳徹子さんは、ちひろ美術館（東京・安曇野両館）の館長です。

ちひろは1918年12月15日生まれ、1974年8月8日、55歳という若さで亡くなりました。

ちひろは、世界中の子どもたちに、幸せと平和を願って、美しい絵を描いて発信し、今もなお、世界中の人々から愛され続けているのです。

しかし、ちひろの人生は、決して平坦な道ではありませんでした。

ちひろの最初の結婚の悲劇

ちひろの人生前半は、とても中国との関わりが深いのです。

ちひろの両親は、ともに長野県出身。父・正勝は、勅命建築技師として陸軍の築城部隊に所属、母・文江は、高等女学校の教師を務めていて、「軍国の母」を育てる教育に携わっていました。経済的には恵まれており、ちひろは、絵を描くことが大好きな山の手のお嬢さんとして生活を楽しむことができました。

でもちひろは、3人姉妹の長女でしたから、絵描きになりたいという希望はかなわず、両親から「家」制度に従って「岩崎家」を守るため、どうしても好きになれない男性を婿養子として迎

え、結婚することを事実上強制されてしまったのです。

婿養子になった男性は、地方出身の二男、「東洋拓殖会社」の社員で、1939年4月、結婚式を挙げた後、中国遼寧省の大連支社に赴任し、ちひろも、泣く泣く後から大連へ行きます。すでに、柳条湖事件いわゆる「満州事変」をでっち上げて、中国に対する侵略戦争が始まって8年が経とうというときでした。「東洋拓殖会社」は、日露戦争によって得た朝鮮に対する權益に基づき設立された国策会社で、その後、アジア全体に勢力範囲を拡大して、日本の植民地政策の経済支配の側面を担っていたのです。

大連では、日中戦争の影響もなく、社宅に住みますが、ちひろはどうしても結婚相手を夫として受け入れることができず、拒否し続けた結果、相手が自殺するという悲劇的な破綻を迎えました。1941年春、遺骨となった相手は、初めてちひろの腕に抱かれ帰国しました。

ちひろの母は大陸の花嫁送出

ちひろが大連で苦悩の生活を送っていた1940年、母・文江は高等女学校の教師を辞め、大日本連合女子青年団の主事に赴任し、「開拓士結婚相談所」となりました。「開拓士結婚相談所」とは、満蒙開拓団、満蒙開拓青少年義勇軍の配偶者いわゆる「大陸の花嫁」を送り出す中枢部です。

大日本連合女子青年団の機関誌『女子青年』の1941年3月号には、「相談所より見た国策結婚5000人の花嫁渡満」という記事があり、文江のインタビューが載っています。花嫁希望の女子団員が多いのに親が反対しているということについて、文江は「ご両親がまだ、全然大陸開拓に認識を欠いているというのは困りますね…。許さないのは吾子（わが子）可愛さの単純な気持ちからなのでしょうが、現在の満州、将来の満州をよく知ったなら、娘の幸福、国家の隆昌のために、喜んで許してあげられると思うのです

けれど…」と語っています。

「将来の満州」にどんな悲劇が待ち受けていたか、を考えると、文江が何も知らなかったとはいえず、「大陸の花嫁」送り出しをこうして実行した、その罪の深さに暗然たる気持ちにならざるを得ません。

ちひろが勃利へ、そして帰国

1941年12月には、太平洋戦争開始。文江は、贅沢全廃委員や大日本国防婦人会代表などになって、戦争の旗振り役を行い、「満州」開拓地視察団副団長などを務め、当時、石原莞爾などと懇意で、「開拓女塾」に熱心に取り組んでいた熊井竹代などとの交流を深めていきました。

ちひろにとって中国・大連での出来事は、思い出すのも辛いことだと思うのですが、1944年つまり敗戦の前年5月に、再び「満州」に行くことになったのです。

それは、文江が大陸の花嫁をたくさん送り出す中枢にいて、全国から実際

に応募した花嫁候補たちを集め引率しては、大陸と行き来をしていた熊井竹代との交流から、自分の3人の娘をもはや、手もとにおいておくことができなくなったという事情からだったと思います。一番下の妹だけはすでに就職しております。

ちひろとちひろの上の妹・世史子と友人二人の4人が、「満州」勃利に行くことになりました。世史子と友人二人は、勃利にある陸軍病院の事務員、いわゆる軍属としての契約を結んでいましたが、ちひろは、創設されて2年目の「女子開拓義勇隊訓練所」（熊井竹代が所長）のお習字の先生という名目だったのです。

4月末、ちひろたち4人の娘は、下関から関釜連絡船に乗って朝鮮半島の釜山に渡りました。このとき、ちひろたちは、まったく知りませんでした。連絡船には、女子開拓義勇隊員として集められた他の若い女性たちも一緒に乗っていたのです。その一人が女子義勇隊員として勃利の訓練所に向かうKさんという人でした。Kさんは、「大陸の花嫁」

になるという認識はまったくなく、「満州」での訓練を受けたら故郷に帰り、お国のために働くつもりでした。Kさんの出身県からの参加者は4人、盛大な壮行会に見送られての出発だったのです。

関釜連絡船で釜山に渡ってから、鉄道で朝鮮半島を北上し、羅津に行きます。そこには、全国から集められた女子開拓義勇隊員（実は大陸の花嫁候補）たちと合流し数十人の集団となり、新京（現長春）・ハルビンを経て勃利まで鉄路で向かうのでした。引率するのは、もちろん熊井竹代。5月10日に勃利に到着。ソ満国境に近い荒野の果て、雪交じりの雨が降る寒い日でした。

勃利には、4500人を収容する青少年義勇隊大訓練所があり、陸軍病院も設備され、なだらかな山肌には弾薬庫も作られている。関東軍のソ満国境に近い一大軍事基地。この軍事力の支配の下、「満州」開拓の拠点の一つでもありました。

しかし、女子開拓義勇隊訓練所は東崗屯という中国人部落（土壁と草ぶきの家、家の中にトイレもなく、ドブが

臭く、着ているものも垢光りして、人々はぬかるみの道を歩いている）のそばに建つ、わらを混ぜ込んだ土壁の長屋とレンガ作りの建物でした。覚悟を決めてきた娘たちでさえ、夢に思い描いた「満州」と現実のあまりの違いに、呆然と立ち尽くすありさまでした。

曲がりなりに軍属としての契約を結んできた妹たち3人は、すぐに陸軍病院に向かい、官舎に入れたのですが、ちひろは一人訓練所に残されたのです。食事も、白いご飯も食べられるといっていた熊井竹代の話とはまったく違って、ごつごつした豆が半分を占めるヒエ入りご飯というのが実態でした。

訓練生の娘たちは、到着後すぐにも、巻き上げ式の井戸の水くみや畑の作業などで忙しく動き回らねばならず、「お習字の先生」としてのちひろの仕事などあるわけがありません。山の手のお嬢さんであつたちひろにとっては、あまりに残酷な現実でした。食事ものを通らず、たちまち心身症のような状態になってしまいました。

しかしそのちひろは、救われたのです。

たまたま、ちひろが東京でお習字を教えていた少女の叔父が、勃利に駐屯していた関東軍連隊長の森岡正陸軍大佐でした。森岡大佐は、自分の姪のお習字の先生が、女子訓練所で、身体を壊しているを知り、ちひろを連隊長官舎に引き取ってくれたのです。6月には、そのことを森岡大佐が娘への手紙で知らせています。

森岡大佐の官舎に移ってからは、ちひろは優雅な生活を過ごすことができました。何しろ当番兵は、神田のすし屋さんと神戸の洋食屋さんでしたので、食材も吟味され美味しい食事で、時々陸軍病院で働く妹たち3人も加わって、ごちそうにあずかることもあり、女子訓練所にいる隊員たちには想像もできないものでした。

森岡大佐は、外国語も堪能なうえに、「万葉集」などにも精通した文化人で、絵も上手だったので、ちひろにとっても森岡大佐にとっても、官舎での生活は、文化の香りのする、まるで異次元の世界であったのではないのでしょうか。しかし、サイパンの玉砕をはじめと

して南方での戦況がますます悪化し、7月末には、森岡大佐に、フィリピン方面へ転戦せよという命令が下り、8月4日には勃利を出発しています。この間に、森岡大佐は「満州」での戦況が安全でないことを見通し、ちひろたち4人の娘を帰国させることを決断、陸軍病院を統括していた部隊長の猛反対を押し切った末に、8月末にはちひろたちの帰国を実現させました。

ちひろ帰国後の勃利では

ちひろたちが帰国した後、前記のKさんたちは、各地の開拓団に派遣され、そこで農作業などの訓練を受けていました。そして、開拓団の独身男性との結婚話が進められていったのです。Kさんは、「訓練が終わったら帰国する」と最後まで抵抗していましたが、熊井竹代から「それなら、憲兵隊に連れて帰ってもらう」と脅かされ、結局、熊井竹代にすすめられた人との結婚を承諾させられます。11月23日には、降りしきる雪の中、50組の集団結婚式が行

われ、それぞれ配偶者の所属する開拓団へ向かったのです。

龍虎開拓団に行ったKさんはすでに妊娠していて、夫は7月の根こそぎ動員で出征してしまい、女手ひとつで、家畜の世話や農作業をしなければなりませんでした。

8月9日ソ連軍の侵攻により、逃避行が始まります。雨のぬかるみの中、勃利までたどり着き、最終列車といわれた貨物列車に乗り込んだものの、たちまちソ連軍の空爆を受け、山地を逃げ惑いながら牡丹江を目指すも、川に阻まれます。同じ龍虎開拓団の人たちのうち、一緒に逃げていた4人は自決し、勃利で一緒だった人も途中で皆殺されてしまい、逃げ惑いながらソ連軍の難民収容所に入ります。しかし毎晩ソ連兵が襲ってくるので、ある夜脱走して、たどり着いたところが勃利近くの七台河でした。その地主の家に世話になり下働きをしていましたが、いよいよ出産も近づいてきたとき、中国人のTさんと結婚することになり、何とか救われたのです。無事出産して、

その後も優しいTさんとの間に子どもも生まれましたが、結局残留女性となり、様々な苦労を重ね、1980年に自費で帰国を敢行したのです。

森岡大佐の尽力がなければ、ちひろもKさんと同じような運命をたどって、私たちは今、ちひろの美しい絵を見ることはできなかったでしょう。

帰国したちひろも妹も、それぞれ就職しました。12歳以上の未婚の女性は、女子挺身隊として危険な軍事工場などに駆り出されるので、ちひろの親も就職をさせるべきと考えたようです。

その年秋から、米軍による各都市に対する空襲が始まり、毎日空襲警報に脅える日々となります。

やがて1945年5月25日、ちひろ一家は山の手大空襲に遭い、戦火の中を命からがら逃げ惑う体験を経て、両親の実家のある長野県に疎開します。ちひろはそこで、敗戦を迎えます。

敗戦後のちひろ 自立への道

敗戦直後から、ちひろはこれからの

日本がどうなっていくのか、様々な不安の中でも、なんとか自分らしい生き方を求める模索が始まっていました。

それは、8月16日から始まる「草穂」と題するちひろの日記によく表れています。最も強く影響を受けたのが宮沢賢治です。宮沢賢治の自然の事象に対する細やかな視点、詩や文学での豊かな表現方法、あふれるばかりのヒューマニズムとその質素な生き方などに共感し、学びながら、様々な人々とのつながりの中で、文化活動などにも取り組んで、その視野を広げ、思索を深めていったのです。

そのような素地を自分で努力しながら作り上げてきていたときに、ちひろの人生にとって決定的な転機が訪れます。

1946年1月13日午後、松本市の松本城近くの松本市公会堂（写真1）で開かれた日本共産党の演説会に、ちひろは下の妹の準子といとこの大池弘一の3人で参加しました。

敗戦の年の12月15・16日に、日本共産党長野県党組織再建大会が開かれ、そのとき私の両親もそろって入党しま

した。この演説会は、県党組織再建後初めての公然活動として開かれたものでした。なお、私一家も戦前東京神田猿楽町に住んでいたのですが、1945年4月13日の大空襲に遭い、母方の実家の長野県松本市に疎開していたのです。

私も両親に連れられて、この演説会場に行っています。私の目には、1枚の写真のようにちひろの姿が残っています。とにかく当時の物不足でみんな



写真1 1946年1月当時の松本市公会堂（『思い出のアルバム』郷土出版社より）

ひどい服装をしているなかで「わあ、素敵なお姉さんがいる！」と6歳の私にも記憶に残るような個性あふれるおしゃれな雰囲気を持っていました。ちひろが、この演説会に参加したことこそが、その後のちひろの人生を決定づける大きな転機となったのです。

いとこの大池弘一が残した日記によると、この演説会で私の父・菊池邦作が「共産党は恐ろしいか」という演題で話をしています。邦作は、戦前共産党員ではありませんでしたが、侵略戦争反対を主張したり、国民が主人公で、自由で豊かな平等な社会を作るという社会主義の理想に共鳴して活動をしたため、治安維持法違反で9回も逮捕され、最後の逮捕のときにはよく生きていられた：と思われるほどの激しい拷問を受けた経験があり、敗戦直後から治安維持法撤廃のために奔走していたのです。そして、この演説会の3週間ほど前の12月19日には、「拷問」という題のかなり長い手記を書き上げていました。私は、父の演説内容などはまったく記憶していませんが、母・弘子によれば、あの戦争が侵

略戦争であり、これに反対したり、天皇制を批判したりすれば、治安維持法違反で、投獄されたり、殺されたりしてしまうことなど、自分の受けた体験を話し、恐ろしいのは共産党ではなく、絶対的天皇制・ファシズムとこれを暴力的に支えた治安維持法体制であることを熱っぽく訴えたようです。

ちひろが受けた衝撃は大きいものがありました。自分の両親が推し進めたのはアジアへの侵略戦争であったこと、そしてこれに反対した人たちがこの日本にいたこと、その人たちが殺されるようなひどい弾圧を受けたこと…、ちひろが知らなかったことばかりでした。

母は、ちひろへ自分の家に来るように誘いました。母も、ちょっとおしゃれ好きなところがあり、ちひろの感性と共鳴するところがあったからでしょう。

それから、ちよくちよくわが家に来るようになりました。たくさんさんの青年たちや治安維持法で投獄されていた人、文化人も集まり、政治や文化・哲学などを語り合うあたかもサロンのような雰囲気だったようです。

ちひろも熱心にそのような会合に参加していたのですが、一人で来て、母と話し込んでいることもありました。

そんなある日、おそらく2月の下旬か3月の初め頃だと思われませんが、ちひろは、私の両親のところに行って、「共産党に入党したいので推薦人になってください」と頼んだのです。

両親が、ちひろに入党を勧めたわけではありません。両親は、少し驚いたというのが正直なところ。「え？ このお嬢さんが？」と思ったそうです。でも、その志は本当にうれしくて、両親はそろって推薦人となりました。

こうしてちひろは、誰かに庇護されたり、誰かが決めた人生を歩むのではなく、自分が選んだ道を、自分の力で歩んでいくという「自立した」人間として、その明確な一歩を踏み出したのです。

ちひろが、入党してからの最初の活動は、ポスター描きでした。折しも、3月11日から戦後初の総選挙活動が始まったのです。4月10日が投票日。女性も初めて選挙権が行使でき、日本国民が主権者となる日でした。長野県が

ら立候補している日本共産党の候補者を当選させるため、ほとんど唯一の宣伝手段といえるポスターはとても大切なものでした。もちろんすべて手描き。

当時は、まったくもののない時代であったので、ポスターを描く紙を探すだけでも大変、絵具やポスターカラーなども満足にないのです。なんとか集めてきたいろいろな種類の紙をこぎれいにまとめ、ちひろは、せっせとポスターを描きました。母は「ちひろさんの描くポスターは、絵がきれい。また字が素晴らしいの」と言っていました。

それでもちひろは「もっときれいなポスターを描かなくちゃ」というのが口癖だったそうです。

ちひろは、自分の描く絵や書が、自分自身が大好きだから、それを描くことで「自己実現」できる喜びだけでなく、それが、人々のところをとらえ、つなぎ、広げることができるものだということを初めて知ったのだと思います。絵や書には、そういう力があること、それ自体がとても素晴らしいことで、それがまた自分の喜びにも、活力にもなるということ

がわかり始めたのです。そのためにもっともつと勉強したい…という強い思いがわき上がってきたのでしょうか。

選挙も最終盤、4月7日の共産党の機関誌『アカハタ』に載った小さな一段記事を、ちひろは見逃しませんでした。「日本共産党宣伝部・芸術学校」で生徒を募集しているという記事でした。ちひろは直ちに応募を一人で決断。開校は5月2日、非常に慌ただしい日程でした。しかし、決断すれば行動するというのは、実は、ちひろの行動パターンだったのです。

ちひろの上京そして松本善明との結婚へ

1946年5月2日早朝、ちひろは1年で一番美しい季節になる信州を後にして、上京し、「日本共産党宣伝部・芸術学校」に入校しました。

当時の幅広い民主的な人々や運動を対象とした『人民新聞』の記者として就職し、画家の丸木位里・俊子夫妻（後に「原爆の図」を描く）とも知り合いになり、その後も丸木夫妻から絵

の指導も受けるようになります。

ちひろは、絵の仲間を通じて芸術家団体にも加入して、様々な芸術家とも交流が深まり、やがて絵だけで自立を目指すようになります。

そして、1949年8月、ちひろは、内神田の共産党居住支部の会議で、初めて松本善明に出会い、やがて愛し合うようになります。

1950年1月、善明の方が7歳半年下という困難を超えて、二人はめで



写真2 長男を抱いて夫・善明と／ちひろ32歳、1951年
（写真提供：ちひろ美術館）

たく結婚。最初の悲劇的な結婚とは違い、まさに憲法24条を地で行くように、「両性の合意のみで」二人の婚姻は成立したのでした。

1950年秋に、私と母・弘子とが、東京・原宿で、まったくの偶然からちひろと再会して以来、親しい交流が復活しました。ちひろと再会したときは、ちょうど善明が司法試験を目指し、猛勉強をしている最中で、ちひろが絵筆1本で二人の生活を支えていました（写真2）。

その後、ちひろの描く多くの子どもの姿がたくさんの人たちに親しまれるようになり、また、優秀な編集者にも恵まれ、様々な絵本を作り出して、童画家として、押しも押されもしない立場を獲得していったのです。晩年には、ベトナム戦争に反対するメッセージを込めて『母さんはおるす』『戦火の子どもたち』などを仕上げてきました。善明は、弁護士から日本共産党の衆議院議員となり、国政の場で重要な役割を果たすようになったことはよく知られています。

ちひろが亡くなる2年前の雑誌に、次のようなインタビュー記事が載っています。

「戦争が終わってはおじめてなぜ戦争が起こるのかということが学べました。そしてその戦争に反対して牢に入れられた人がいることを知りました。殺された人がいることも知りました。大きい感動を受けました。そしてその方々の人間に対する深い愛と真理を求めるところが命をかけてまでこの戦争に反対させたのだと思います」（『人生手帳』1972年11月号、文理書院）。

「人間に対する深い愛と真理を求めるところ」を自分のものとして、そのところが原動力になり、成長し、花開き、「いわさきちひろ」という童画家になることができたのだと、私は信じています。

ちひろの中国での体験は？

ところで、ちひろは、中国での体験（大連のことも勃利のことも）を文章としては、何も残していません。語った記

録やほかの人の記憶にもありません。

これは、私にとっては大きな謎ですが、大連での体験はあまりに過酷で、ちひろにとって自分の人生の中に、「なかったことにしておきたい」と、そのページを閉じなければ前に進めなかったからではないかと、私は何となく理解できます。

勃利のことは、母・文江が大陸の花嫁を送り出していたことは、知っていたと思いますが、それがどんなに残酷な結果をもたらしたのかは、はっきりわかっていなかったかもしれません。善明氏も、「残留孤児や残留女性のこと」が社会問題になったのは、ちひろが亡くなった後だった……と言っておられました。

しかし、ちひろが、自分の両親が推し進めていた戦争が侵略戦争であったことを知ったときの衝撃の大きさを考えると、とくに勃利の東崗屯という村での中国の人々の生活状況は嫌でも目にせざるを得なかったのだと、深く胸をえぐるものがあつたのではないでしょう。また女子訓練所に残された女性

たちと森岡大佐に庇護されていた自分の境遇の違いにもここを寄せ、戦争とそれを実行する軍隊の本質について、感覚的に感ずるものがあったのではないかと私には思えるのです。

だからこそ、二度と戦争は起こしてはいけない、そのために、「人間に対する深い愛と真理を求めるころ」という言葉に表現して、それをしっかりとわが手にする決意ができたのだと、私は信じています。

現在この地球上で、ウクライナ戦争とイスラエルによるガザ侵攻が起きて、再び無辜の民、とくに子どもたちが、毎日たくさん殺されている事態が進行しています。もし、ちひろが生きていたら、どんなにかここを痛め、世界中の人々に、戦争をやめるようにと、新しいメッセージを送る活動をすると思います。

しかし、日本の現政権は、あたかも「台湾有事」が起こるかのような危機感をあおりながら、集団的自衛権を備えた自衛隊に、さらに敵基地攻撃能力を持

たせて、大軍拡を進め、アメリカ軍の指揮の下、世界中にどこにも出撃できるような体制を進めようとしています。

あの侵略戦争により、アジアの人々にどれほどの苦痛を与え、侵略した側の日本の国民にも、どれだけの災厄をもたらしただのか、その事実さえ消し去って再び「戦争する日本」として現れようとする動きが強まっています。

私は中国の内部問題に発言するほどの知識も力ありませんが、少なくとも、ちひろの中国との関わりを思い起こしながら、日本国憲法前文と9条を規範として、日中両国の国民どうしが互いに絶対に戦争をしないという誓いを実現・実践するために善隣・友好運動を進め、自らの国の中で、それぞれできる活動を行っていくことが大切ではないかと思っています。

お断り：

私たちは、「満州」という言葉に慣れておりますが、中国の人々にとっては、侵略された場所に傀儡政権が作られたのでとても屈辱的に感じていて、

「偽満州」と呼んでいます。本来なら「中国東北部」と表現すべきと思いますが、本誌ではカッコつき「満州」とさせていただきます。

(2025年2月6日・公開講演会)

筆者略歴(ひらやま・ともこ)

1939年生まれ。1964年東京大学法学部卒業。1966年弁護士登録(松本善明法律事務所所属)、1978年都民中央法律事務所開設。

1996年日本弁護士連合会「両性の平等に関する委員会」委員長(任期1年)。2004年5月、あかしあ法律事務所開設。憲法・治安維持法・ちひろの人生などをテーマに講演、執筆活動。公益財団法人いわさきちひろ記念事業団評議員。

主な著書・論文に『女の事件簿』『女の事件簿PARTⅡ』『若きちひろへの旅(上・下)』『家裁弁護士―ミモザの花言葉のように』(いずれも新日本出版社)、「憲法9条への確心―体験的護憲論」(『月刊憲法運動』2024年7月号〜12月号)。

中国

ウエッチング

編・訳 上松玲子



本当に自発的なのか

先ごろ広西チワン族自治区百色市のある小学校は、保護者委員会を通じて保護者に学校の安全を守る活動への参加を呼びかけた。その中である母親が生後数か月の赤ちゃんを抱いて、40分間も校門前で警戒活動をしたのだが、このことに多くの人々が怒りを示した。

参加呼びかけの根拠は、公安部弁公庁と教育部弁公庁が共同で発行した「小中学校及び幼稚園の安全防犯対策規範

（試行）」である。その中には、学校の登下校時間には、すべての校門に警備員を配置し、人や車の誘導や見回りをする

ことと、教師と保護者ボランティアを組織して校内と校門で警戒活動を行うことが記されている。だが、保護者の参加はボランティアと書かれており、義務や強制ではない。

話題の母親は産後数か月で、とても警備ボランティアに参加できる状況ではないが、学校は彼女をボランティアとした。学校は責任を保護者委員会に押し付けるかもしれない。保護者委員会が功を焦ってやり過ぎたのは否定しないが、学校がそれを速やかに止めなかったのなら、管理責任を問われるべきだ。

我が子の学校でたまに1時間ほどの警備に立つこと自体は親にとって大した負担ではない。問題は、自発的であることが既定として「処理」さ

れ、義務に変貌していることだ。規範厳守も、親への敬意もない。

学校の安全確保はやはり警察と学校が担うべきだ。学校も保護者委員会も、保護者に参加を強制すべきではない。自発的に参加する保護者についても配慮すべきだ。同時に、教育主管部門は保護者による校内警備の「レッドライン」を明確に定め、違反した学校は処罰すべきである。

『齐鲁晚报』2025年5月16日

路地裏に幸せ運ぶ赤いバス

済南の街を歩くと、街路や路地を行き交う「紅墩墩」と呼ばれる小型バスが、街の風景として目に入る。コンパクトな車体と柔軟な配車システムを備えたこれらの小型バスは、スマートな姿で従来の路線バスのサービスが行き届かない部分を補っている。済南

公共交通の担当者によると、

今年5月時点で路地裏（原文：小巷）バスは計33路線が運行され、1日3万人以上が利用しているという。

小さな路地裏には、市民生活にとって大きな問題が潜む。交通手段の多様化に伴い、地上公共交通機関の利用率が低下していることは紛れもない事実だ。しかし、視点を変えれば、利用率の低さは、地上公共交通機関の潜在能力が十分に発揮されていないことに起因するといえる。従来の公共交通機関では都市計画や道路事情の制約で効果的にカバーできない居住区もあり、その利便性の低さが、住民のバス離れを招いている。

路地裏バスは、支道、裏通り、路地裏などの狭い地域に特化したバス路線だ。点から点、ドアツードアという運行特性により、従来の規制を打ち破り、バス本来の柔軟性と拡張性を最大限に発揮できる。

狭い支道に囲まれた居住区から幹線道路、地下鉄の駅、交通ターミナルへ人の流れを作る。しかも、便数も多いため待ち時間も少なく、市民は自宅のすぐそばで便利で快適にバスを利用できる。

路地裏バスは市民の日常を便利にするだけでなく、文化スポットや商業施設を結び、都市の魅力を発信する手段ともなっている。例えば済南市の577路地裏バスは、貢院牆根街、県東巷、按察司街など従来バス停のなかった歴史ある街並みや、超然楼、芙蓉街、寛厚里などインフルエンサーのチェックインスポットもつなぐ。この路線を利用すれば、済南の歴史的な魅力と現代都市の活力を感じることができるのだ。

『経済日報』2025年5月27日

受験の神が消えたわけ

2016年「7分で有名大

学34校解説」動画で人気を博し、受験生やその親から信奉され、その発言によって、さまざまな大学や専攻の合格点や志願者数が急落したり急増したりした。張雪峰氏は6月2日「多くの人の人生を左右してしまった」と涙ながらに「お別れ宣言」を出しライブ配信の中止を発表した。彼の成功はオピニオンリーダーとしての資質だけでなく、点数主義、キャリアプランの欠如、複雑な学生募集規則などの問題点に対して正確な把握と分析をしたことによる。

今後は第二、第三の張雪峰を探さなければならぬのか。いや、見落とされてきた重要な道がある。それはキャリアプランニング教育だ。

どの大学、選考に志望書を出すのか、張雪峰に代表される受験コンサルタントを利用するのは手軽な道だ。「12年の学校教育、2日間の大学統

一入試、2時間の願書提出」が現実の中、コンサルタントを利用するメリットは、「迅速」だ。しかし、受験生の個性や興味への配慮は薄まる。どれほど多くの受験生と保護者が、混乱した状態の中コンサルタントを訪れ、「学部や専攻は気にしない。いい就職につながるなら、この成績で入れる最高の大学に進学したい」ということばを残しただろう。

一方でキャリアプランニング教育は長期的なプロセスだ。すべての子どもが受ける最もシンプルなそれは「大きくなったら何になりたいか」という質問だ。その利点は児童生徒が自分の理想を確立するのに役立つことだ。その本質は功利主義にとらわれず明確な思考で選択を行い、明確な目標、強い動機を持つようになることだ。

だが、中国におけるキャリ

アプランニング教育の発展は思わしくない。小中学校の校長の大半が、進学率や大学統一試験の点数低下のリスクを冒してまで、それを積極的に行おうとはしない。矛盾を先送りした結果、募集要領は頻繁に変更され、選考基準は複雑化し、受験生は「張雪峰」らに選択を委ねることになった。

現実と興味を結びつけることは元来普通のことだが、単にキャリアプランニングコースを開設するだけでは解決できない。「張雪峰」を信じる人はいるだろう。チャンスが一度きりなら、誰もが一番大きくて赤いリングを選びたくなる。「何も考えずに行け」と叫ぶ「張雪峰」とは違う新しい指針やガイドが必要だ。

『中国科学報』2025年6月5日

陶陶俳壇

句会
結果
2025年5月

兼題 「桜桃忌」および当季雑詠

馬場由紀子

子等のあぬ遊具三つ四つ花の雨 松島二三四

◎由紀子

暖かな春ならば子どもたちも外で遊びたいだろうに、今日は雨。子どものいない遊具はどこか寂しげだが、「花の雨」の措辞が寂しくなりすぎずに救われる。

◎正子

早朝が昼時か夜更けかに桜吹雪の児童公園を通り抜けたときの情景でしょうか。

カートごと空へ誘ふ青嵐 //

◎正子

吹き渡る爽快な初夏の風が感じられます。「誘ふ」が楽しい。

◎明良

カートもつとも飛ばす強い風の危うい状況を楽しく読み替えた。「誘ふ」のゆとりが頼もしい。

背の吾子に漏れる陽碧し柿若葉 //

◎えつこ

おんぶの赤ちゃんの柔らかな肌に木漏れ日がちらちらと揺れる。やさしい情景です。十七音に情報量がたっぷりです。

茴香の匂いも溢る水餃子 やまやえつこ

◎紅朽

ウイキョウ(茴香)は英語名からフェンネルとも呼ばれ甘味のある香りと樟腦のような風味があり、香辛料や薬草などとして用いられ、果実もスパイスとして利用される。古代エジプトやローマでも栽培され古くから親しまれてきた植物のひとつ。地中海沿岸が原産とされ、日本には平安時代に中国から渡来した。花期は夏(7~8月)で、秋には麦粒状の果実をつける。日本では焼き餃子が多くみられるが、中国では水餃子として食することが多い。旨味たっぷり

◎三三四

りのツルツとした水餃子の食感がさっぱりといただける一品です。

日本で餃子の餡の野菜と言えば白菜、キャベツですが、大陸の水餃子の餡には多種多様な食材が使われますね! 茴香の餃子という「漢方薬劑を餃子の材料に?」と日本の方には思われそうですが、独特の香りと鮮やかな緑でもとてもおいしく、個人的にはいちばん好きです。思いがけないところで「茴香水餃」と再会でき、うれしくてたまりません。

色も香も貴妃に優れる白牡丹 //

◎三三四

貴妃は中国王朝の後宮の身分のひとつですが、多くの人は楊貴妃を連想しそうです。皇帝の寵愛を受ける美女よりも白牡丹のほうが美しく香りも高い。そう言えば中国の国花は(赤い)牡丹ですね。

◎明良

我が家にはありませんが近くの家に綺麗な牡丹が咲いています。我が家に貴妃もいますが色褪せ多言で比べるべきありません。

鮎の宿長押に並ぶ猪の牙 大内善一

◎三三四

作者は鮎の深流釣りを楽しみに、泊りがけで出かけたのでしょうか。山の日暮れは早い。宿の主と語りつつと見上げると長押には立派な猪の牙が並べられている。畑を荒らす猪も、鮎と同じ山の恵み、里山の地道な営みの中に命の循環を感じます。

◎明良

奥深い宿の景色で囲炉裏にかかった猪鍋と串に刺して焼く鮎はさぞかし美味でしょう。

帰省には虎屋羊羹土産とす //

◎紅朽

室町時代後期、京都で創業した和菓子屋「とらや」全国で80余店舗を有する。明治2年(1869)東京遷都の折、京都の店はそのままに東京の赤坂の地に店を構えた。平成30(2018)年には売り場、喫茶、ギャラリー、製造場からなる低層の建物に改築し、ゆったりと菓子を楽しめる店となった。設計は建築家・内藤廣。

すまし汁蛤の味他になし 上野京

◎善一

幼き日蛤の蓋ママごとと //

新緑や芽吹き遅れし梅古木 日野正子

◎三三四

遅れてちゃんと芽を吹き、ほかの木同様美しい新緑を広げる梅の古木に励まされます。

◎紅朽

梅は新緑の季節前に咲くが、古木となると芽吹きが遅くなるのであろう。

春雷や花の憂いを切り捌く //

◎明良

先日の豪雨と春雷には驚き慌てふためきました。ほどほどが良いですね。

◎えつこ

「切り捌く」が春雷の効果をうまく表していると思います。

枯れ川のごとき流れを鮎泳ぐ 瀬崎明良

◎由紀子

水の少ない川。それでも鮎は生きるために餌場を探して川を登ってゆく、その生命力は眩しく作者の目に映ったに違いない。「枯れ川」は水の枯れた冬の川のこと、「ごとき」はあるが冬の印象が強くて出しまつので「鮎泳ぐ浅き流れに逆らひて」としてもよいかも。

桜桃忌三鷹の義母も今は亡く //

◎由紀子

昭和が薄れていきますね。

桜桃散り実梅転がる石畳 橋本紅朽

◎正子

神田川またいでなびく鯉のぼり //

◎正子

アパートの薄暗き灯や桜桃忌 馬場由紀子

◎善一

桜桃忌、太宰治の忌日6月19日を指している。太宰治の印象は、残された写真で見ると暗く陰鬱な表情、片手で頬を支えている姿である。それが、この句の「薄暗き灯や」によく歌われている。そのため特選とした。

*旧かな、新かな、作者の意図に任せる。

令和7(2025)年度
役員・顧問・諮問会委員名簿

会長 井出亜夫

顧問(50音順)

岡田実

加藤聖文

河合弘之

高原明生

成田正路

藤原作弥

古海建一

松重充浩

三原朝彦

村田忠禧

八島継男

矢吹晋

常務理事(会長不在時の事務代行順)

(事務局長) 竹前栄男

理事(理事就任順)

姜晋如

朝浩之

大類善啓

佐藤嘉信

高橋昇

畑尾成道

福島靖男

藤沼哲朗

増野亨

常任監事

北野雅教

監事

加來洋二郎

諮問会委員(50音順)

澤村宏

新宅久夫

瀬崎明

松葉敏弥

宮内雄史

村田嘉明

令和7(2025)年度
常任委員会 委員長・副委員長・委員名簿

○環境委員会(11名)

委員長 福島靖男

副委員長 伊大知重男

委員 石飛仁 牛木久雄

澤村宏 姜晋如

杉山秀子 橋本公佑

藤木英夫 村瀬廣

村田嘉明

○国際交流委員会(10名)

委員長 姜晋如

副委員長 瀬崎明

委員 岡田実 成川敏夫

畑尾成道 藤井毅

村瀬廣 村田忠禧

村田嘉明 八島継男

○講演委員会(9名)

委員長 高橋昇

副委員長 日野正子 松重充浩

委員 井出亜夫 加來洋二郎

古閑哲 佐藤建吉

増野亨 松葉敏弥

○広報委員会(10名)

委員長 朝浩之

副委員長 村田嘉明

委員 伊大知重男 井出亜夫

大類善啓 姜晋如

志村照彦 原田克子

福島靖男 村瀬廣

○東北委員会(11名)

委員長 大類善啓

副委員長 松葉敏弥

委員 古閑哲 新宅久夫

鈴木重治 塚原美津子

寺西修司 成川敏夫

村瀬廣 村田嘉明

渡辺澄江

○経営委員会(5名)

委員長 井出亜夫

副委員長 佐藤嘉信 藤沼哲朗

委員 竹前栄男 増野亨



◆令和7年度第3回理事会の議題（6月20日開催）

新理事による第1回目の理事会で、主な内容は次のとおりである。

各常任委員会の委員長から提示のあった副委員長、委員について審議し、承認した。また今後の委員会の在り方、今期の計画についても審議した。

5月30日に開催された総会の審議内容、議事進行について意見交換を行った。

（事務局長 竹前栄男）

◆寄贈図書

高媛様（駒澤大学グローバル・メディア・スタディーズ学部教授）より自著『帝国と観光―「満洲」ツーリズムの近代』（岩波書店）。

会員だより

◎新会員

〈正会員〉 広江勉氏、諏訪哲郎氏

〈協力会員〉 岡本孝夫氏

同好会だより

〈俳句会〉 馬場由紀子先生

毎月第2水曜日午後1時から、オンライン（ズーム）での俳句会を開催。未経験者も大歓迎ですので、興味のある方は事務局までご連絡ください。

〈謡曲会〉 松木千俊先生

お稽古は一人ずつの個人指導です。未経験者も大歓迎ですので、興味のある方は事務局までご連絡ください。

へ二石会

毎月第2土曜日午前11時から、7階談話室にて開催。囲碁初心者歓迎。参加希望者は、開催日前々日（木曜日）までにメールで幹事（瀬崎明 aseken2000@gmail.com）までご連絡ください。

みんなの写真館

シャーヒー・ズインダ廟群（表紙）

2025年6月に、古代シルクロードの中継地であったウズベキスタンを訪れた。シャーヒー・ズインダ廟群は、ウズベキスタンの古都サマルカンドにある壮大な建築物と霊廟の集合体であり、その歴史的・文化的価値からユネスコ世界遺産に登録されている。

同廟群の最奥部にあるのが「シャーヒー・ズインダ」、すなわちベルシャ語で「生ける王」を意味する名称で呼ばれるのが預言者ムハンマドの従兄弟、クサム・イブン・アッバスの霊廟といわれる。

これらの霊廟の建築様式は、イスラム建築特有の青いタイルやモザイクによる装飾、幾何学的アラベスク模様が特徴となっている。

シャーヒー・ズインダ廟群は、中央アジアの建築と文化の頂点を象徴する遺産だ。（姜晋如）

徐福殿（表4）

青島市から約70キロ東の膠南県琅琊台に徐福殿がある。

徐福は斉国（前1046～前221年）の徐福村の方術士の家柄。秦の趙政（のちの始皇帝）に滅ぼされて併合され、秦の琅琊台に移り住んだ実在の人物といわれる。

始皇帝に不老不死の仙薬を探すように命じられ、多くの童男童女を引き連れて船出したという記述が『史記』にある。また大航海の末たどり着いたのは日本だったという伝承もあり、徐福一行の子孫を名乗る人びとが日本各所に存在する。

*中国最古とされる薬物書『神農本草経』にも、仙薬、霊薬について記述されている。（新宅久夫）

2025年8月の行事予定

9日（土） 11：00 一石会囲碁例会（於7階談話室）

20日（水） 13：00 俳句会
兼題「稲光」および当季雑詠から5句を投句（7月30日までに）

20日（水） 15：30 広報委員会

22日（金） 14：00 公開 第4回【21世紀アジア塾】講演会
「日本統治下の台湾で大きな貢献をし、現地の人々に今も尊敬されている二人の日本人の功績を紹介し、今日の日台関係を考える」
北野雅教氏（当会会員）

※8月13日（水）～15日（金）は、事務局はお休みします。

8月の会議予定

20日（水）15：00 広報委員会 |

※ほかの委員会などは休会です。

※下線は通常日程に変更あり。

【9月初めの講演会予定】

4日（木） 14：00 公開第12回対面&オンライン講演会
「日本とモンゴル」（仮題）
清水武則氏（元モンゴル駐箚特命全権大使）

11日（木） 14：00 公開第13回対面&オンライン講演会
「世界秩序の変容と中国」
高原明生氏（東京女子大学特別客員教授、東京大学名誉教授、当会顧問）

みんなの 写真館

ISSN0386-0345
二〇二五年（令和七年）八月一日・毎月一日発行



徐福殿の碑文に見入る筆者



徐福殿敷地内の孔子像



同じく始皇帝像

INTERNATIONAL GOOD NEIGHBORHOOD ASSOCIATION (IGNA)

<https://www.kokusaizenrin.com>

「善隣」第五六二号（通巻八一九）

発行所

〒一〇五〇〇〇四 東京都港区新橋一五五

一般社団法人 国際善隣協会

電話 〇三三五七三三〇五（代表）